臨床検査部（採血・採尿室）が統合診療棟３階に移転

臨床検査部の採血・採尿室が２０２５年11月、中央診療棟（旧棟）から統合診療棟（新棟）３階に移転しました。移転を機に検査システムを大幅に更新するなどし、患者さんの待ち時間の短縮を図りました。

待ち時間短縮図りシステムを更新

臨床検査部は血液・尿の検査や、感染症の検査、心電図などの生理機能検査を担当しています。生理機能検査は25年５月、一足先に新棟３階に移転していました。25年11月以降は、採血・採尿も生理機能検査と同じフロアでできるようになり、一部の患者さんにおかけしていた旧棟―新棟間の移動のご不便を解消できました。採血・採尿室は診療エリアにも近く、検査から診察までの流れがよりスムーズになりました。

検査システムの変更に伴い、３階に新たに自動受付機を導入しました。採血・採尿と生理機能検査は、原則として自動受付機で受け付けますが、複数の診療科の血液・尿検査をまとめて受けられる場合など一部のケースでは、有人対応での受付となります。

また、患者さんの待ち時間を少しでも減らすため、受付開始は従来の午前８時半を30分早めて８時としました。採尿も８時から開始し、採血については、病院側の準備が整い次第、８時15分頃から呼び出しを開始できるようにしました。自動受付機の設置に伴い、以前のような番号札の配布を取りやめます。また、モニターでの番号表示を患者支援アプリからも確認できるようになりました。採血のためのブースの数もこれまでの９を13まで増やし、特に午前中の混雑の緩和に努めています。

13に増設された採血ブース

診察予約に応じた検査時刻

さらに、検査は受付順ではなく、当日の診察予約の時刻に応じて呼び出す方式に変更しました。通常、採血から検査結果が出るまで１時間～１時間半程度かかります。患者さんの待ち時間を減らすと同時に、診察までに確実に検査結果が間に合うことを目指しています。例えば、診察予約が午前11時の場合、採血の呼び出しは９時半以降となります。診察予約が午後、または当日に診察予約がない場合、採血の呼び出しは午前10時半以降となります（呼び出し時刻の目安については図表をご参照ください）。移転前は、特に朝早い時間は立って待たれる患者さんもたくさんいらっしゃったほどの混雑は、こうした変更により緩和できています。

本院では、１日に外来で約７００人、入院で約５００人の計約１２００人分の血液検査をしています。尿検査や生理機能検査、感染症検査なども合わせた検査の件数は年間１１８万５９２８件に上ります（24年度）。

臨床検査部は、診察を受けられる患者さんのために、診療科から依頼を受けた検査を実施し、正確な結果を速やかに返すことが使命です。臨床検査技師ら約70人体制で、できる限り早く検査結果を出せるよう努めています。

システム更新は検査にかかる時間を早め、ひいては患者さんの待ち時間を短縮することが大きな目的です。移転後、間もないこともあり、受付方法の変更などで患者さんにご不便をおかけするケースも生じていることをお詫びします。今後、システムの習熟とともに検査が一層スムーズに進められるよう努めてまいりますので、ご理解のほど、お願いいたします。

採血の呼び出し時刻の目安

当日の診察予約時刻※1	採血の呼び出し時刻
8:30 ～	午前 8:30 以降
10:00 ～	午前 8:30 以降※2
10:30 ～	午前 9:00 以降
11:00 ～	午前 9:30 以降
11:30 ～	午前 10:00 以降
12:00 ～	午前 10:30 以降
診察予約が午後の方 当日診察予約がない方	午前 10:30 以降

※ 1. 当日複数の予約がある場合は、最初の診察の予約時刻で判断します。
※ 2. 当日診察予約が 8:30 ～の患者さんの採血が終わり次第、呼び出し。
※ 診察の内容などにより例外もあります。

祝！坂口志文先生ノーベル生理学・医学賞受賞
制御性T細胞の発見と今後の医療

ノーベル賞受賞が決まり学内で記者会見する坂口志文先生＝２０２５年10月６日

免疫は病原体や異物から私たちの身体を守る仕組みです。免疫ではたらく細胞の中から、坂口志文先生は制御性T細胞（Treg）を発見されました。この細胞は、免疫が強く反応しすぎないように抑える、いわば「免疫のブレーキ役」です。Tregの量や働きをうまく調整することは、感染症、がん、免疫疾患、移植医療など、さまざまな病気の治療に関わる鍵になると考えられています。自己免疫疾患や臓器移植後の拒絶反応では、Tregを補うことで免疫の暴走を防ぐ治療法が研究されています。一方、がんではTregの働きを一時的に弱め、身体ががん細胞と闘う力を高める治療の開発が進んでいます。

こうしたTregを利用した治療は、将来の医療応用を目指し、現在も多くの臨床研究が進行中です。阪大病院では、患者さんが安心して治療を受けられる環境を整えつつ、診療科を超えて免疫の仕組みを深く理解し、制御性T細胞の臨床応用に向けた取り組みを一丸となって続けてまいります。（免疫内科　西出真之）

新　診療科長等ごあいさつ

渡邊（わたなべ）　美穂（みほ）
●小児外科長

このたび、小児外科長を拝命しました渡邊美穂と申します。歴代科長が築かれた外科栄養、小児がん、小児移植、低侵襲手術などの幅広い診療体制を受け継ぎ、胎児手術や再生医療、医工連携をさらに発展させてまいります。患者さんの未来を見据えた包括的医療と教育に努め、医局員と共に小児外科の新たな価値創出に取り組みます。今後ともご指導ご支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。

（令和7年11月1日就任）

小玉（こだま）　尚宏（たかひろ）
●消化器内科長

このたび、消化器内科長を拝命いたしました。消化器内科は、消化管、胆膵、肝臓にわたる幅広い臓器・疾患を対象に、内視鏡・超音波診療を中心として、診断から治療まで一貫した内科医療を担っております。消化器がん、炎症性腸疾患、慢性肝疾患など多様な病態に対し、薬物療法や集学的がん治療を推進するとともに、新規治療薬開発や臨床研究にも取り組んでまいります。外科をはじめとする他診療科・多職種との連携を通じ、安全で質の高い医療を実践し、阪大病院への貢献に努めてまいります。

（令和8年1月1日就任）

バイオテロ災害対応訓練を実施

10月10日、阪大病院においてバイオテロ災害対応訓練を実施しました。これは阪大病院の近辺で炭疽（たんそ）菌によるバイオテロが発生したことを想定し、災害対策室、高度救命救急センター、感染制御部、看護部、検査部などが合同で行った訓練で、吹田市消防本部にもご視察いただきました。実際に患者さんが搬送された場合に必要となる災害テントを組み立てて、除染、検査、入院の流れについて確認を行いました。

豊能広域災害時の救急医療を訓練

本院は地域災害拠点病院です。要件として、災害時の緊急対応、災害派遣医療チーム（DMAT）を保有、救命救急センターまたは第二次救急医療機関であること、地域の救急医療機関等とともに定期的な訓練を実施すること等が必要です。

10月18日（土）に17医療機関（42名）と3保健所にご参加いただき、大阪大学コンベンションセンターにて研修会を開催、広域災害・救急医療情報システムの入力訓練と豊中市保健所による講演を行いました。

阪大病院 NEWS
No. 101 号
THE UNIVERSITY OF OSAKA HOSPITAL
2026（令和8）年1月25日発行
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会（総務課）
住所／〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-15
TEL ／ 06-6879-5111（代表）
ＱＲコードから本院ホームページをご覧いただけます
https://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp
禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

マスク着用ルールについて

- 院内感染対策のため、**市中の感染症流行状況に併せてルールが変わります。**最新の情報は、本院ホームページまたは院内掲示をご確認ください。
- **個別の状況**によって、医師の指示でマスク着用をお願いする場合があります。
- **せき、くしゃみ、鼻水等の症状がある方**は、「マスクを着用する」「ティッシュ・ハンカチなどで口や鼻を覆う（袖、上着の内側も OK）」などの**”咳エチケット”**で感染予防をお願いします。

大阪大学「ワニ博士」

病院再開発基金へのご寄附のお願い

再開発事業の第１弾として2025年の5月に統合診療棟が開院となりました。統合診療棟は、外来機能、中央診療機能および一部病棟機能を備え、診療機能の向上と災害拠点病院としての役割強化を実現しています。

第2弾では、外来棟跡地に新病棟を建設予定で、統合診療棟と既存病棟をつなぐ接続パスの整備も計画されています。

1993年の全面移転以降、病棟は構造的限界から時代のニーズに適応できなくなっています。統合診療棟整備での治療機能強化に続き、患者さんの快適な療養環境整備が求められています。

再開発のコンセプトは、“Futurability 待ち遠しくなる未来へ。”です。今後の再開発事業にご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

▼詳しくはこちらをご覧ください

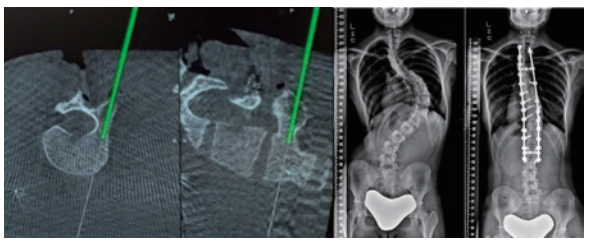
大阪大学未来基金

神経機能を守り 低侵襲で安全な手術

統合診療棟で先進的ナビゲーション導入

整形外科（脊椎グループ）

整形外科の脊椎グループでは、頚髄症や腰部脊柱管狭窄症、腰椎椎間板ヘルニアといった頻度の高い変性疾患から、脊椎変形矯正手術や脊髄腫瘍など高度な専門性を要する疾患まで、幅広く診療しています。神経障害の原因となる圧迫病変を的確に除圧し、インプラントによる安定した固定を行うこと、さらに脊椎・脊髄腫瘍では神経機能を守りながら腫瘍を適切に切除することが基本です。そのうえで、世界的潮流である「より低侵襲に、より正確に」の実現を目指しています。



右特発性側弯症に対する椎弓根スクリューを用いた矯正固定術
左術中に撮影したCT上にリアルタイムにデバイスを表示

ナビゲーション下の内視鏡手術

変性疾患に対しては、内視鏡・顕微鏡手術を積極的に導入し、筋肉や靱帯への損傷を最小限に抑え、早期社会復帰につながる低侵襲手術を提供しています。一方、側弯症をはじめとする高度脊椎変形や脊髄腫瘍などリスクの高い手術では、術中神経モニタリングにより神経障害の兆候を早期に捉えつつ、ナビゲーションシステムを組み合わせることで、高度で安全性の高い手術を実現しています。

2025年5月には、新たな統合診療棟の稼働に伴い手術部が移転・刷新されました。多軸型CT様画像撮影装置（ARTIS pheno, Siemens）を備えたハイブリッド手術室が2室整備されたことで、高精度画像下でのナビゲーション手術を日常手技として行える体制が整っています。脊椎インストゥルメンテーション手術では、術中CTによる3D画像と連動したナビゲーションを用い、スクリュー位置や重要構造をリアルタイムに確認しながら挿入することで、安全域の確保と手術時間短縮、合併症リスク低減、再手術率抑制が期待されます。

脊椎・脊髄腫瘍手術においても、腫瘍と神経・血管の位置関係を術中に把握し、より確実で機能温存に配慮した切除が可能となりました。また、術中透視装置の使用を減らし、医療者の被ばくを大幅に軽減できることも非常に大きなメリットと考えられます。今後も統合診療棟での先進的な手術環境を活かし、低侵襲で安全かつ質の高い脊椎外科治療を一人ひとりの患者さんに提供してまいります。

リハビリテーション部

理学療法　作業療法　言語聴覚療法

患者本位の先進的なリハビリ

リハビリテーション部は、医師4人、理学療法士24人、作業療法士4人、言語聴覚士3人が所属し、とくに急性期の入院患者さんの機能改善、回復のための高度で適切なリハビリ医療を実施しています。院内の全診療科からリハビリ依頼を受け、2024年度の初診依頼患者数は延べ2891人です。

病棟9階のハートセンター内にある心臓リハビリ室では、理学療法士7人が病棟の看護師と連携して、急性心筋梗塞や大血管疾患などの患者さんの筋力、体力を回復させる運動療法を実施しています。急変時にも対応できるサポート体制や、訓練時に窓外の万博記念公園を見下ろせる眺望など、患者さんの評判は上々です。

病棟7階の呼吸器センター内でも、理学療法士5人が呼吸器疾患や肺がんなどの患者さんに早期の呼吸器リハビリを実施しています。高度救命救急センターの患者さんにも病棟の看護師と協力し、積極的なリハビリを実施しています。

右1階作業療法室
左9階心臓リハビリ室
下1階理学療法室

病棟1階の理学療法室は開放的で明るい空間です。技士10人が所属し、変形性関節症やスポーツ外傷、パーキンソン病、脳卒中など、運動機能障害の患者さんの基本動作能力を回復する訓練を行います。複数の専門資格を持つ技士が各診療科の医師と連携し、専門性の高い療法を実施しています。言語聴覚療法室では技士3人がそれぞれ完全個室で、失語症などのコミュニケーション障害や嚥下障害のある患者さんの回復訓練を行います。作業療法室の一角にはモデルルームのようなキッチンや冷蔵庫、浴室ユニット、和室などが設置されています。技士4人が所属し、食事や着替えなどの退院後の日常生活に必要な動作能力の回復を手助けします。肩、肘、手の運動や指先の巧緻な動作能力を回復する訓練も行います。

リハビリは患者さんとの顔の見えるコミュニケーションが基本です。毎年の阪大病院の患者満足度調査では、リハビリ職員の対応にほぼ100%の満足をいただいています。今後も患者さんに寄り添い、3職種が医師や看護師、他職種と円滑に連携して患者さんのQOL回復に真摯に取り組んでまいります。

令和7年度

大阪大学賞を受賞

業績名

大阪大学医学部附属病院 統合診療棟建設プロジェクト

この度、大阪大学医学部附属病院の「統合診療棟建設プロジェクト」が令和7年度の大阪大学賞を受賞しました。本プロジェクトは、単に統合診療棟の建設・運用を目的としたものではなく、患者さんのための快適な医療環境の提供、次世代を担う医療人の育成、そして病院全体としての高度医療体制の強化を目指した取り組みです。

再開発委員と再開発企画整備室のメンバー

この受賞は、再開発委員会及び再開発企画整備室を中心に、診療科や事務部門など全病院スタッフが団結し、課題を共有しながら協力して進めた「チームエフォート」の成果によるものです。さらに、多くの患者さんや地域の方々にもご理解とご協力をいただき、このプロジェクトを全員参加型の成功事例にすることができました。この受賞を励みに、阪大病院は未来志向の医療体制を進化させ、患者中心の医療の実現へとまい進してまいります。

ホスピタル ミニ・ニュース PHOTO TOPICS

阪大病院見学会

2025 10/24

手洗い講習を受講いただき、病理部や薬剤部、ベッド洗浄を見学いただきました。

阪大病院がんサロン

2025 12/19　第34回

管理栄養士による「がん治療中の食事」をテーマにした講演会を開催しました。科学的根拠のあるがんのリスクと食材との関係や、症状別の食事のひと工夫など知りたかったことが知れるような講演でした。参加者からは「あまり神経質にならなくてもよいと安心した」「具体的でわかりやすかった」などのご感想をいただきました。

小児医療センターEVENT

関西学生アメリカンフットボール連盟様より

ゴールドセプテンバー

2025 11/12

フラッグで子どもたちにエールを送っていただきました。

絵本寄贈

2025 11/26

心のこもった絵本を多数ご寄贈いただきました。

NPO法人ホスピタルフットボール様より

サンタ回診

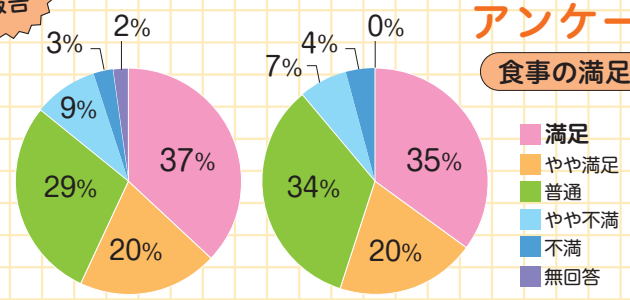
2025 12/23

やさしいサンタさんがプレゼントを持ってきてくれました。コンサートも実施し、素敵な音色が病棟に響き渡りました。

ご協力いただいた企業・団体（五十音順）
- NPO法人キープ・スマイリング様
- NPO法人日本クリニクラウン協会様
- OSAKAあかるクラブ様
- 株式会社アデランス様
- 株式会社マインドウェイブ様
- UHA味覚糖様

結果報告 病院食アンケート

食事の満足度



入院患者さんを対象に病院食アンケートを実施しました。食事の満足度については、一般治療食では86%、特別治療食では89%の方から「満足・やや満足・普通」と回答いただきました。特別治療食の方へ「ご自宅でも病院の食事を参考にしようと思いますか」とうかがったところ、90%の方に「はい」とお答えいただきました。また、「毎日おいしい料理に感謝します」「以前の入院時より美味しくなっています」などの嬉しいご感想や、「朝食の卵焼きのだし感が感じられない」「マカロニが固い」など食事へのご意見もありました。今回のご意見を参考に、今後も「美味しい」「自宅でも作りたい」と思っていただけるような食事を目指して取り組んでまいります。

特別治療食「肝臓食」の献立
- 大阪寿司
- たこ焼き
- 肉すい
- 酢の物
- 丁稚羊羹（栗入）

おすすめ御膳

11月28日におすすめ御膳を実施しました。今回は川村事務部長の「食欲の秋、大阪の活気ある味で元気を届けたい」というメッセージとともに大阪グルメを提供しました。特別治療食は、「たこ焼き」をはじめ、「肉すい」、北摂地域の郷土料理「丁稚羊羹」のほか、調理師が手作りした押し寿司「大阪寿司」でした。押し寿司は、もてなし料理の定番として大阪で親しまれてきた文化があります。小児食のデザートは可愛らしい“豆柴”をイメージして1枚ずつ焼きあげた「どらやき」です。今後も患者さんに楽しんでいただける企画を考えていきたいと思います。

小児食デザート